

北海の古平風土物語（二六）

2. 津軽ヘンソトコさん
大正十五年・高等科二年

吉岡 橋 植 千葉信夫先生
担任 千葉信夫先生

五口

この年、三月末ころから走り鯨の乗りがよくなつた。長兄（故小野寺地作）は、「ニシンドアイリヨウスル」（スグタテ）と、津軽の木造（きづくり）町に電信（電報）を打つた。これは昨年八月、農閑期のお盆のころに、酸ヶ湯温泉（青森県）の湯治場で部屋仲間になつたあんさまにだといふ。

四月二十日、晴れ、凪よし。鯨中漁あり。夕方近くに瑞広丸（余市・古平・美國間の定期貨客船で二十トンぐらい）の第二便がやつて來た。デッキも客室の屋根の上にも、いっぽいの船客であった。「鯨の神様」（鯨漁夫）や「手間取り」（出面稼ぎ人）のほか、帰省する人たちを満載して來たのである。津軽からの「あんさま」も、この船

客に混じつてやつて來た。そして、浜の刺網番屋（今の古平橋の西側にあつた）に着いた。縞のツッポ袖の着物に半ち重廻し（マント）を引っかけて大きな番頭シャツボ（鳥打帽）を被り、長靴履きという姿であった。着替えを入れた、茶褐色の大きな信玄袋を肩に掛けて、大玉の津軽りんごを詰めた籠を片手にぶら下げて、いつぶう変わつて見える風体の、三十歳ぐらいの「あんさま」であつた。

× × × × ×

番屋では、ちょうど晩飯の始まる時である。あんさまは入口の津軽りんごを詰めた籠を片手にぶら下げて、いつぶう変わつて見える風体の、三十歳ぐらいの「あんさま」であつた。

「めえめえ（うまいうまい）、まづめえのにすさんべあ（鯨三平）めえもんだねす」

「おづづぎ（安着）に、まんづ一杯」、「あごつなぎ（顔合わせ）に一杯」と、すすめられ茶碗酒を、うまそうに飲みほしていた。

刺網船頭（故堀川金蔵さん）は、「これずんぶ大きもんだな、おめえ方で何ンてんだ」と、聞くと、「わえのゆぎのすただえ、わらすのこんべのもあねえ」

※「雪の下」（りんごの種類（品種））のひとつで、青森地方では、雪の降るころまで木にならせておくと大変おいしくなることから、一般にこう呼ばれている。正しくは《国光（こっこう）》北海道では、明治以来の呼び名（輸入した時の番号）である、四十九号の名前でよく知られている。

かわ（私）木造だえ、手間取りさ来たえ。」「津軽リンキ喰つてけへえ」と、持つて來た筆を出した。

長兄は、早速と、津軽弁コで迎えた。これは湯治場へ行つて覚えてきた津軽ことばであった。

あんさまはのつそりと上がって来て、炉端にあぐらをかいて座つた。大きな三平皿に盛つたピカピカの生鯨の三平汁を食べながら、

まづめえのにすさんべあ（鯨三平）めえもんだねす」と、さかんにほめたてる。

「おづづぎ（安着）に、まんづ一杯」、「あごつなぎ（顔合わせ）に一杯」と、すすめられ茶碗酒を、うまそうに飲みほしていた。

本陣の浜のはしけ船の船着場から上がりつて、浜通りを歩いて来る途中の廊下（生鯨を入れる倉）の鯨が、ピチピチと生き跳ね上がりつているのを見てきたのであつた。その後も笑いの止まらない話が続いた。

「わが家の雪の下だ。子どもの頭ぐらいの大きさの玉もある」

大笑いであつた。

やつと意味が分かつて、みんな

はボソボソしていて、少しほけだしていたが、柔らかいリンキであった。

あんさまは、

「松前のニースア（鯨）、おがね（陸に）いるねす」

「びんびど跳ねです」と言う。

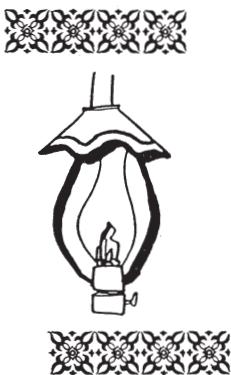
三
國
志

お盆風景

今年も八月十三日から二十日まで、一日も欠かさずお墓参りをした。特別に信仰心が厚いと、いうわけでもないのに、これも永年の習慣なのだろう。

それにしても、ここ二、三年の間にずいぶんと墓地も整備され、気持ちよくお墓に行けるようになつたのはありがたいことだと思う。簡易舗装された道路

になって昔のおもかげはない。墓そのものも立派に建てられて、いるのを見ると、不況の感などは無い。どのくらいの人があお詣りするのか、過疎化した古平の何倍にもなる人の数でしょう。もちろん札樽方面、そのほかから日帰りの人も来ているのでしょが、おそらくお盆休みを利用して、それぞれ幾日か泊まつていく人も多いはずである。道路で会つただれ彼に会釈されても、見たような顔だと思うが、さてだれだつたけなあ？ なか



大旱(ひでり) 花蘭枯れつく
す武道館

故郷を想ひ福井幸至

まで、一日も欠かさずお墓参りをした。特別に信仰心が厚いと、いうわけでもないのに、これも永年の習慣なのだろう。

それにしても、ここ一、三年の間にずいぶんと墓地も整備され、気持ちよくお墓に行けるようになつたのはありがたいことだと思う。簡易舗装された道路

この機会にクラス会なども多
く墓地が整備されたのに、供物
その他のゴミを片付ける習慣が
今にして無いのは残念である。
お互に気をつけましょ。こ
れはチョットした心掛けででき
ることだ。

じて。
人はみな善人であることを信
ぬ古平のお盆風景である。

なか思い出せずに失礼する人が多い。お許しあれ。

遠い思い出がいまも

渡辺ハツエ

私の住む御崎町は、昭和二十四年五月の大火灾の後に区画整理されて、入船町から分離したも

遊び道具の主なものは、ユケ、たが廻し、竹馬などいろいろありました。

子どものころから慣れ親しん
できた入船町から、御崎町の住
人となって四十四年、町名が変
わったからといって別に生活に
支障をきたすこともなく、今で
は安住の地となっています。
永い歳月を省みますと、いろ
いろと懐かしいことが脳裏に浮
かんできます。

二ヶといふ語源ははつきりしませんが、生の雑木を三十センチぐらいに切つて、先を尖らして作ります。柔らかい土の所を選んで、水を注いで刺さりやすくしてコゲを突き立てる。相手はそのコゲにぶつけてそれを倒そとします。倒されたコゲは、相手に取られてしまいます。自分のコゲが一本も無くなつてしまふと、「身代ボロボロになつた」と言つて、くやしがつたものです。

昔の入船町は、鮓場の網元の町といつても過言ではないほどで、十余戸の網元の家と干場があり、道路をはさんだ浜も網元の所有地でした。

あり、道路をはさんだ浜も網元の所有地でした。春の鯨漁期が終わると、漁船や数の子を干していた広い干場は、子どもたちにとつての格好の遊び場でしたから、昔の子どもたちは、遊び場には困りませんでした。

自分たちで遊びを考え、考案した道具を持ち寄っては、楽しんでいたのです。

昔、主人が、小学二年生の甥に竹馬を作つてやつたことがあります。甥は一生懸命になつて練習をし、わずかの間で上達して、楽しそうに乗つて遊んでいたことが、とても懐かしく思い出されます。(二段目へ*)

になつて昔のおもかげはない。墓そのものも立派に建てられてゐるのを見ると、不況の感などは無い。どのくらいの人があつたりするのか、過疎化した古平の何倍にもなる人の数でしよう。もちろん札樽方面、そのほかから日帰りの人も来ているのでしようが、おそらくお盆休みを利⽤して、それぞれ幾日か泊まっていく人も多いはずである。道路で会つただれ彼に会釈されても、見たような顔だと思うが、さてだれだつたけなあ？ なか

(*下段から) 明治生まれの主人に、チョッピリ昔の子ども遊びを語つてもらいました。

ふる里のいと

浅利

喜美子
(旧姓・高野名)

昨年から、主人の仕事の関係で道南の江差町に住むことになりましたが、古平にでも帰ったような懐かしさを感じるのはなぜか？と、不思議に思つておりました。

それがわかつたのです。

「海」と「言葉」なのです。

今、古平でも使われているかどうかわかりませんが、私の子どもこのころは確かに使つていた言葉なのです。

江差と古平は日本海沿いでかつて鮸漁でにぎわった町であり、其通点が沢山あるのは当たり前としても、こんなに今も、昔の言葉が残つて使われているのに驚きました。主人がわからないのを通訳？したり、懐かしくてメモをしました。

・ジョッピンかう॥カギをかけ
・チヨス॥さわる、いじる
・ホンズケナイ॥ピンとこない
感じない

- ・シモウ॥しめる
 - ・ホトル॥ほてる、あつくなる
 - ・ホイド॥いやしい、乞食
 - ・ケル॥(物を)上げる
 - ・ンダ、ンダ॥そうちだ、そうちだ
 - ・酒ツンデ॥酒をついで
 - ・エサイグノ॥家へ帰るの
 - ・といつたぐあいです。私と同年代か、それ以上の方にはおわかりだと思います。

今も、夜明けと共に漁師仲間の無線が聞こえていますが、古平生まれの私でさえ「ではドンゴ——」だけしかわからないことがあるんです。浜言葉なのでしょうが、あんなに濁音が多くて濁るので、決してきれいな言葉とは言えないけれど、それが何とも言えぬ親しみを感じるのです。

それと「海」、私が小さかつたころ、毎日朝起きると④の浜が目の前でしたから、海を見て育つたせいか、海を見るとほつとするのです。

古平を離れて三十余年、また

- ・海のある町に住める幸せは言葉だけではなく、食べるものにも感激があります。
 - ・くじら汁
 - ・ササゲとすし鰯の三平汁
 - ・イモだんごとカボチャのだんご汁
 - ・コレレン（うるち米を蒸して練つてのばした、せんべいのような菓子）
 - ・けいらん（来客のあつたときなど、白玉だんごの中にあんを入れ、シイタケの冷たい汁をかけたもの）
 - ・など、昔、母がよく作つてくれた味が、まだいっぱい残つているんです。

「五古羅漢の
一由来碑

「五百羅漢の由来碑」

昭和四十八年九月
曹洞宗禪源寺

で、「政界でかなりの金を浪費して……」と、心配そうに書いている。『五百羅漢の由来碑』は富太郎二十五回忌に建立されたもので（檀家総代斎藤林蔵）、その側に建つてある石灯籠の下には、富太郎夫妻の遺骨が分骨されて埋められていると言われているが、確証なにも無い。

毎年、古平へ兄妹で山菜取りに行つていましたが、小樽の兄が先日亡くなりました。さびしくなりましたが、故郷はいつまでも昔のままであってほしい、と思うのは我がままなのでしょうね。

もともと、都會より自然豊かな田舎の方が好きな私ですから、今の生活を満喫しています。

下駄職人として

小野寺 想

職人」という言葉が最近あまり聞かれなくなりました。昔は、職人といわれる人が各業種にたくさんおり

ましたが、今では消えていった業種が多く、その中で技を磨き技術に誇りを持っていた、職人と言われる人たちはめつきり少なくなくなってしまいました。

だんだん消えて行く職人の中には、「下駄職人」があります。昭和の初めころには、古平でもかなりの下駄製造所があつて、そこには下駄職人がいて賑っていました。さつと数えてみても古谷さん・大島さん・本間さん・金子さん・佐久間さん・小野寺（以上浜町）本間さん・福島さん（港町）栄利さん・佐々木さん（新地町）と、十軒ほどもありました。ほとんどは戦前か戦中にやめてしまって、この内いま残っているのは私の所ただ一軒になってしまいました。

私の父も、五、六人の職人を使つていて、工場前の空き地や屋根には、製造途中の下駄を多數積み重ねて乾燥させている風景は、なかなかの壯觀でした。ところが、昭和十年ころから靴が普及するようになると、下駄の需要は次第に減りはじめました。そのため、職人たちも転業する人が多くなり、昭和十二

【今日はこんな日】

衝撃！『鮓漁獲ゼロ』

[昭和5年]

いました。さつと数えてみても
古谷さん・大島さん・本間さん

・金子さん・佐久間さん・小野
寺(以上浜町)本間さん・福島
さん(港町)栄利さん・佐々木

さん（新地町）と、十軒ほども
ありました。ほとんどは戦前か

戦中にやめてしまつてこの内
いま残つてゐるのは私の所ただ
一軒になつてしまひました。

その昔、古平場所が開かれてから古平を支えてきた鰯漁は、明治時代は不漁知らずであつたし、大正時代には豊漁時代を迎えたものである。昭和に入るとそれが一転して高潮で、今も残る豪壮な鰯漁家のほとんどはこの時代に建てられたものである。

凶漁時代と、ここに鰯神話は崩
れてしまった。

凶漁時代と、ここに鯨神話は崩れてしまった。
昭和五年、「春になれば鯨は来るもの」と思いこんでいたがこの年は予想もしない「漁獲皆

凶漁時代と、ここに鯨神話は崩れてしまつた。昭和五年、「春になれば鯨は来るもの」と思いこんでいたがこの年は予想もしない「漁獲皆無」という惨状であつた。記録では三石というから、わずかに磯舟一隻分に過ぎなかつた。

凶漁時代と、ここに鯨神話は崩れてしまつた。昭和五年、「春になれば鯨は来るもの」と思いこんでいたがこの年は予想もしない「漁獲皆無」という惨状であつた。記録では三石というから、わずかに磯舟一隻分に過ぎなかつた。その影響はたちまち町民の生活を直撃し、それによる町内の

望もあり、春の運動会をとりあえず延期することにし、改めて九月五日、通称、本陣の干場で運動会を行つた。

年ころには、古平で下駄を製造しているのは四軒になってしましました。そして職人の高齢化と共に、後継者もなく廃業してしまい、昭和三十年ころには私の所一軒になってしまい、父と職人と私の三人でやつていてましたが、それもだんだん先細り状態でした。

それでも北海道には、大きな下駄製造工場が数か所ありましたが、やがてこれも廃業に追いやられてしまい、昭和五十年ころには一軒も無くなってしまいました。現在では本州方面で作っている下駄が、道内に出回っ

「下駄職人の技を無くすな！
伝統の技術の灯を消すな！」